

町医者だより

平成22年09月号

にせ 大人の百日咳 急増？

＜発行・お問合せ先＞

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

1分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器科

平成21年6月号の町医者だよりにも取り上げましたが、「急増する大人の百日咳」が話題になっています。昨年からの次元の低い話で一般の方を惑わせ続けています。

確定診断はPCRによる百日咳菌の遺伝子検出です

先日、咳が続く近医で採血をして百日咳と診断されたが、数ヶ月後に咳が出現し近医での採血でまたまた百日咳と診断されて当院に来院された喘息の患者様がいらっしゃいました。立て続けに2回も百日咳といわれてさすがにおかしいと思われたようです。日本でできる百日咳の採血検査は百日咳抗体を測定することですが、過去に予防接種を受けているため、ほぼ全員が抗体価が陽性になります。最低でも発症の早期と4週間後の2回抗体価の採血をしてその上昇を確かめないとはいけませんので、先にあげた患者さんは百日咳の診断のための正しい手順に従っていません。このことを知っている医師があまりに少ないことに驚かされます。さらに言うと、日本で行われている採血検査はアメリカやヨーロッパではすでに過去の遺物でPCR (polymerase chain reaction) 法という遺伝子増幅技術で百日咳菌の遺伝子そのものを検出する方法が一般的です。このPCR法は、たとえば結核菌の検出検査法として日本でもすでに行われており、わが国でも保険適用になれば実施可能です。日本ではLAMP (loop-mediated isothermal amplification) 法という独自の遺伝子検査を開発した研究者がいらっしゃいますが (その方と何の利害関係もありませんが)、CDCやWHOが推奨するPCR法を標準の診断検査としてわが国も採用しないと世界の研究者との会話に加わることができません。

日本でもPCR法できちんと検査されている研究者がいらっしゃいます

日本の百日咳患者の数は定点観測といって決められた診療所 (主に小児科) で「臨床的に百日咳を疑われた患者さんの数」を示しており、百日咳菌の検出や抗体検査の結果があろうがなかろうが関係ない、というかなりラフなものです (実はインフルエンザの患者数も症状だけで判断しています)。Googleで「百日咳、PCR」を検索すると3報の報告があります。

①神奈川県衛生研究所の高橋智恵子先生らの報告によると平成19年から20年に百日咳が疑われた患者から採取された咽頭ないし鼻腔ぬぐい液79検体でPCRを行なったところ真の百日咳はわずか3.8%でした。

②愛媛県宇和島で吉田美紀先生らが鼻咽頭ぬぐい液40検体で調べたところPCR法では陽性がゼロ例で先に述べた日本独特のLAMP法で11例が陽性と報告しています。PCR法で1例も百日咳患者がいなかったということです。報告者はLAMP法がPCR法よりも優れていると結論づけていますが、これはかなり強引な結論で、ちゃんとした雑誌に投稿すれば、LAMP法の陽性は何らかの測定ミスとみなされ一蹴されると思われます。

③高知大学であった「真の百日咳の集団発生事例」を高知大学の有瀬和美先生らが報告しています。学生162名の46%、職員212名の70%がPCR陽性でした。注目すべき点は、PCR陽性の真の成人百日咳患者の60%は無症状で咳すらなかったとの点です。この3つの報告から分かることは確かに成人 (大学生) の集団発生があるが、定点観測で得られる「百日咳患者」のうち「真の百日咳」患者は0~4%に過ぎないという、わが国の感染症診断水準の低さを露呈するものでした。今後の診断手順を考える上で高知大学の報告が示唆に富みます。